無難禪師法語

全

202
341

202-341
*1200800114764*

無難禪師眞蹟

異本

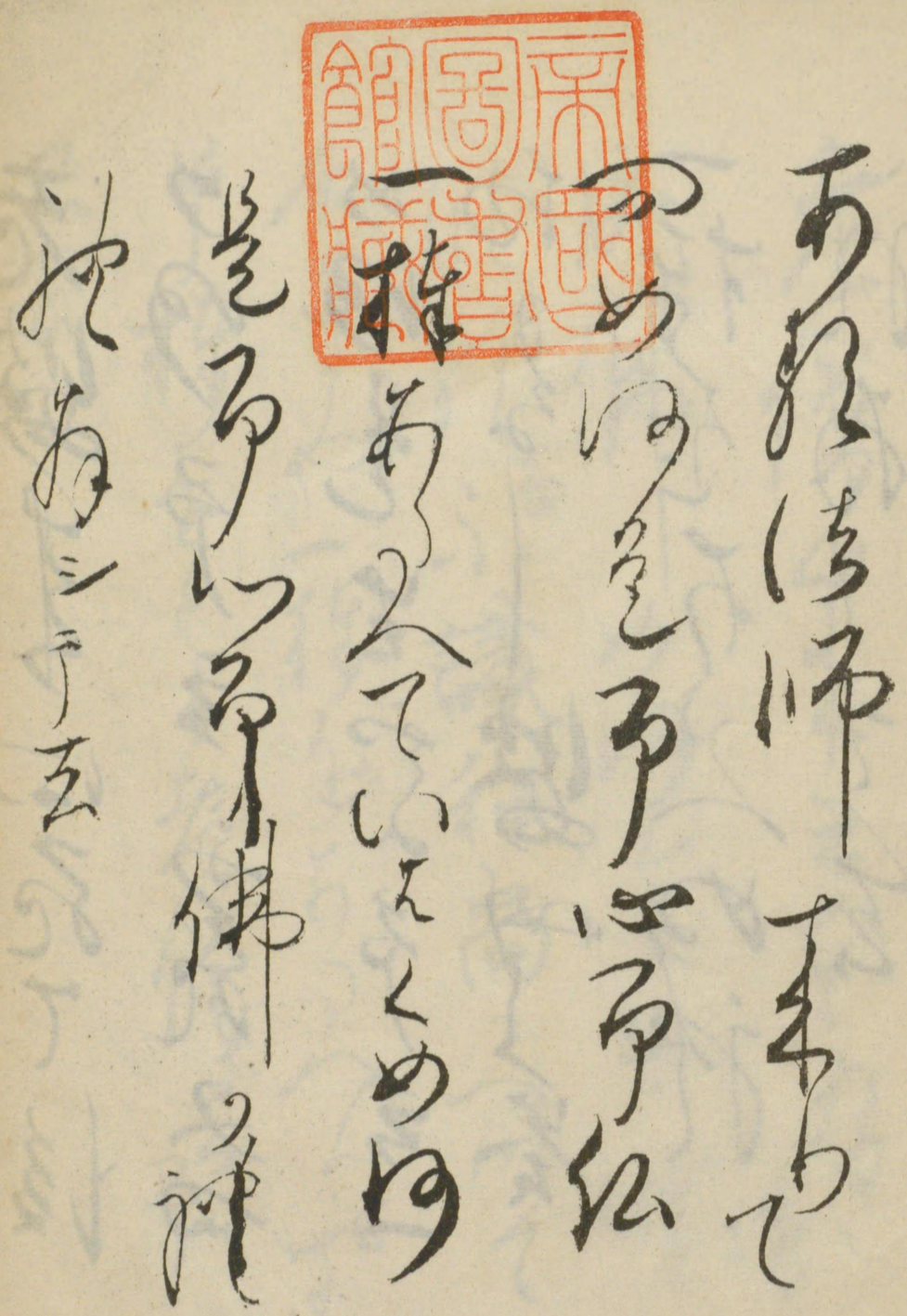
# 假名法語

大正
4. 2. 26
内交

# 毛遂世雄傳法

毒法師

臨濟宗妙心寺派管長　豐田毒湛老師題簽

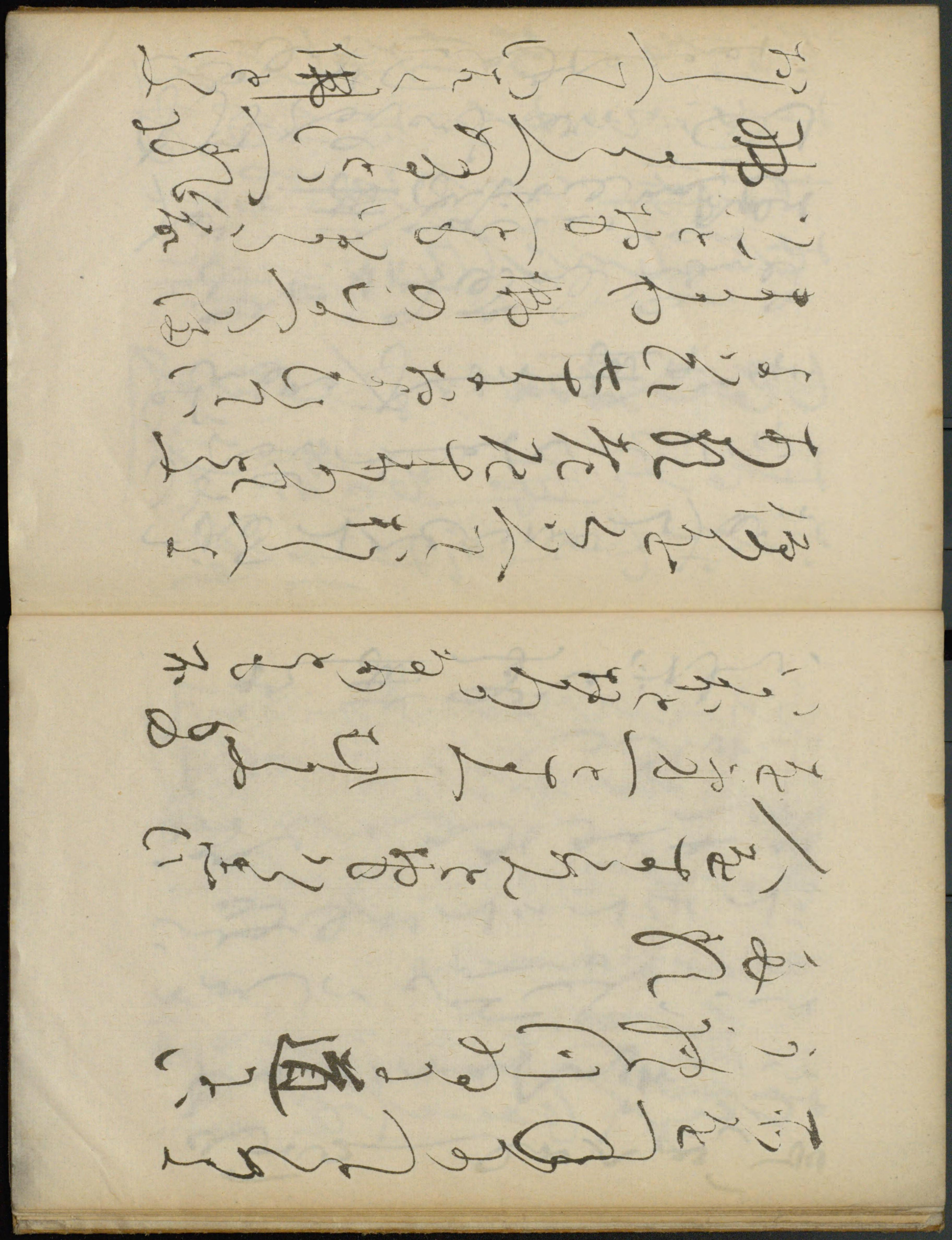


老婆事
ハ四苦ヲ捨
ハ戸ニ入ル又四
めの見生家戸ニ一
ねまし婆四苦
一捨ヲ有ル人めの神
ハ捨ねしそ云

老僧事本云本ハ家
成佛めの四シテ上ヒめと
ハ捨ハ不識和尚ニ問テ
舎ヲ一捨ヲ有ル人ヲ
戸捨ヲ老僧事
又云

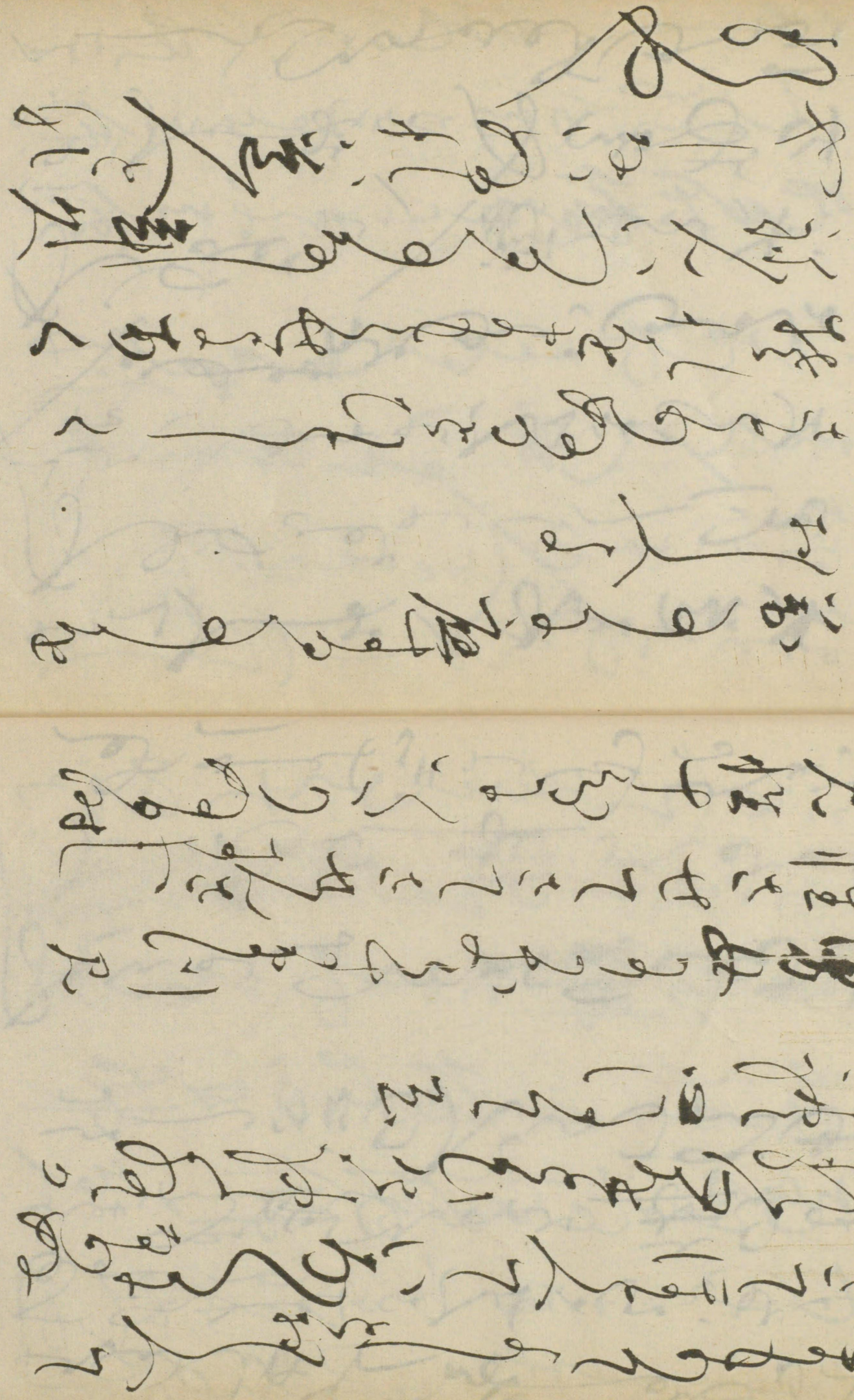
あはれ人のつまの夜隠と、
いやしきのそ事も海
おいはさもとはず
女のみちこくいやしき
所そ事も定ましむ恥
こゝろをたとえ事もなれ

、つまつ神仏経を
事も有りのしれあ之
捨しお有りの行に
いてきてさてその罪
たいやしきこしつうと
と、いとこそよ
事いそくそのしられ



いすれあるいは
つねとなるべき
事なり法華経
ぬ法華経
きを仏とと
をこころすて
となるべしと

なれば
する心仏
つねに
あれば
もの仏
すべし
なり



ぬきもとめ
万物を
大うし霊へ
さそりいのち
天うさせよ
罰しうよ
大道えわくに
ぬてよ

ひとえやくに
ひとそのよ
よくに
よあやまる
万府僧もよ
いつれをとさすそ主命ハ
命ものあるといへ命こと

たれ

又ある時四致智指ねとあ
いかゝ申しまゝとゝへとも
ゆ答なし

又ある僧のいへく佛道の
ねしへ乃ゝ多くはは
といへり予いへく孔子曾子

子思のおしへ釋氏と同い。
たゞ此の僧の孫をしらた
弟子佛のおしへ有くゝ
きて〳〵ゆ云ふ人のちやまちの
年仙〳〵ゆつて世界六
つらいまもし六年
坐して心を入れ

多宝塔に釋迦牟尼仏と
分身の心なり
な一色世界を生ずる
なり一色世界をのれて色花
よまいりの身をえ
れてのみ世をとよましいる
多宝塔をきのまい
心を分つて有るとい
信花厳土天
つて禅とは
七祥に釋迦の大意の
なかまを一物
ら作り来
孔子学問とのまり
なかを尺たたまり
ぬとは住嗜所のまり
羽とは晩りのまり
悦とはなまるまり
曾子の道とはなを

格物といはるるは
子思の氣といふ
ことくしたがふ
方のうつるを性
性にしたがふを道と
かくのごとくの教
さいきんのごとく

ようなる
必ずしもとめまとめ
教宗のごとんかをき
めてわかつ
するのごとくを
有時みるまをもてきて
わかをのもとりは
いうて是道をつくるを
さらそいあきさらるを

み
其の神ゟ有まじき事として
世々住の人もなかりきとぞ見ゆる
又
うたの道をとこそ云ひ起と
かく人あるふうかゆゑや
ある人のいへるは、この道たえてきぬる
その道のえならぬいとも知らでは
俳相をとこそむしろいかはりぬ

くみなめらる
芭蕉翁の今のまのことの神
りしまいりとのいこまで叟
かしらふかのとはりの有て
りちく神しておはし
心よいとこゆくみやし
あるとき神のかしのちは
帰りみぬかなてもその四えなん

うしなひてあり
なんとて
かくつとくまでいの
ちのうちの
ほんりをあれ
たりそくワコ
ヨりあるも
とものちの乃
うれひ
をはしめ
てあれ
もいとる
きてさし
ワるれワ
れ
うれ方ろ
まちまち
うちの人れ世
事
あ人信師なと
つまりくるかれ
才一方をすワ
とすをのつ
ものひきせ
しりそるれ
関を

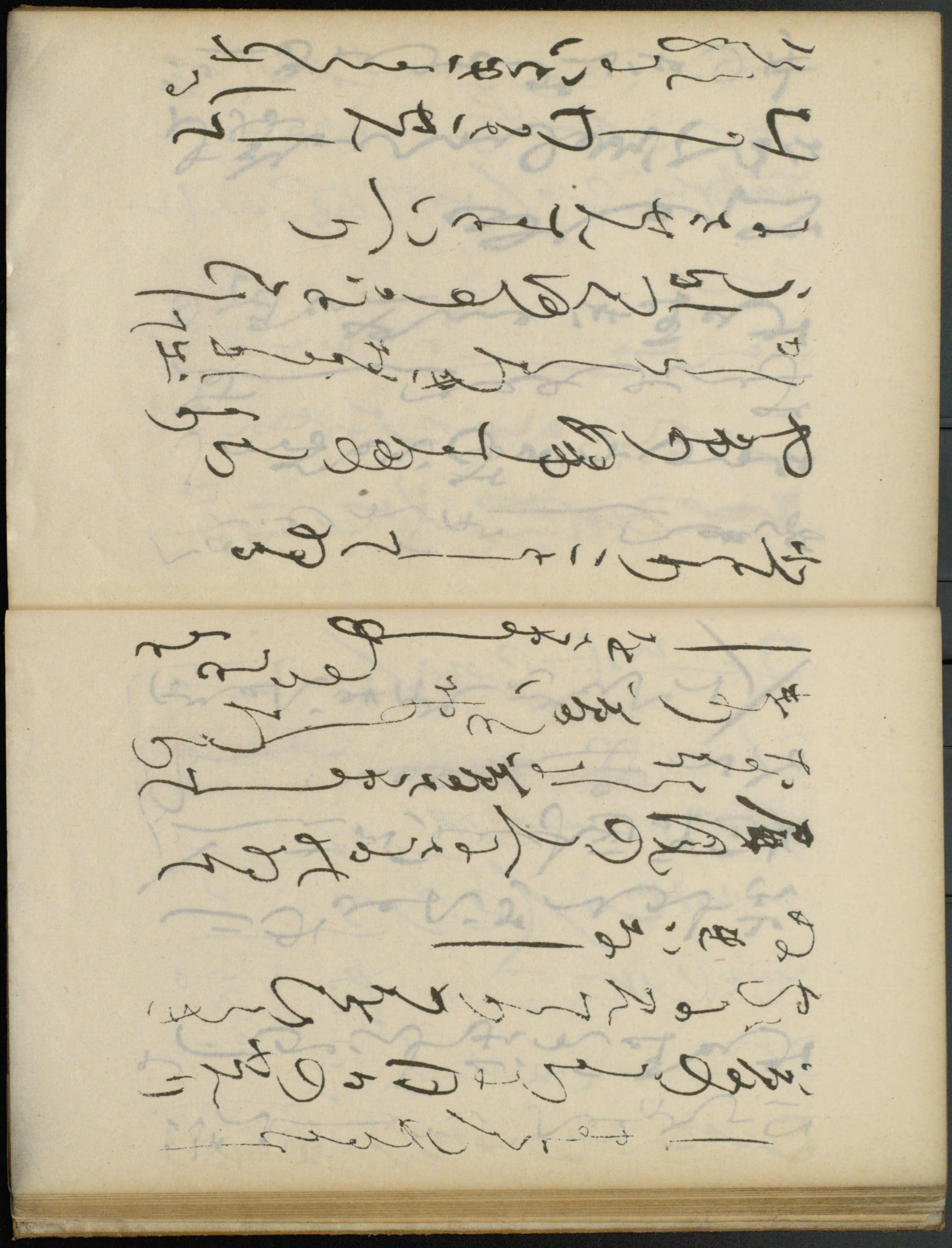
血氣をしつてとうとく
尊きものとうけがたく
尊きまつりやすきはし
らされば　世をいて
法師ぶしもよし
いまこの法花と佛法は
もののうんつくしきなり
ほうこうあるこの乳母のう
ちもりやまひしもりて強
きの子をかりすすめ
釋氏のとうとくあるは
ちいのうるこことりの
出家しやうみまを天竺か

の有りさまを捨てて西を指さんと世を捨てし人は
なくの明らかなる人はつゐに世をいとふこそすまひ
なるべきなれ
浮世をいとふ人は
有りけれ
又
有りけるのこと
なり

ワたくしよりきさきの
いとしいきさまの
菓子の花にこの蝶
と言ふ人の心に
蝶のとまりの
いり
ひとり下の人といえれ

人てらをかしをまうすを
人て那きさのしる
又同じ人
祝ふておうまりあり

あ何とと祝ふ
いらをまうして



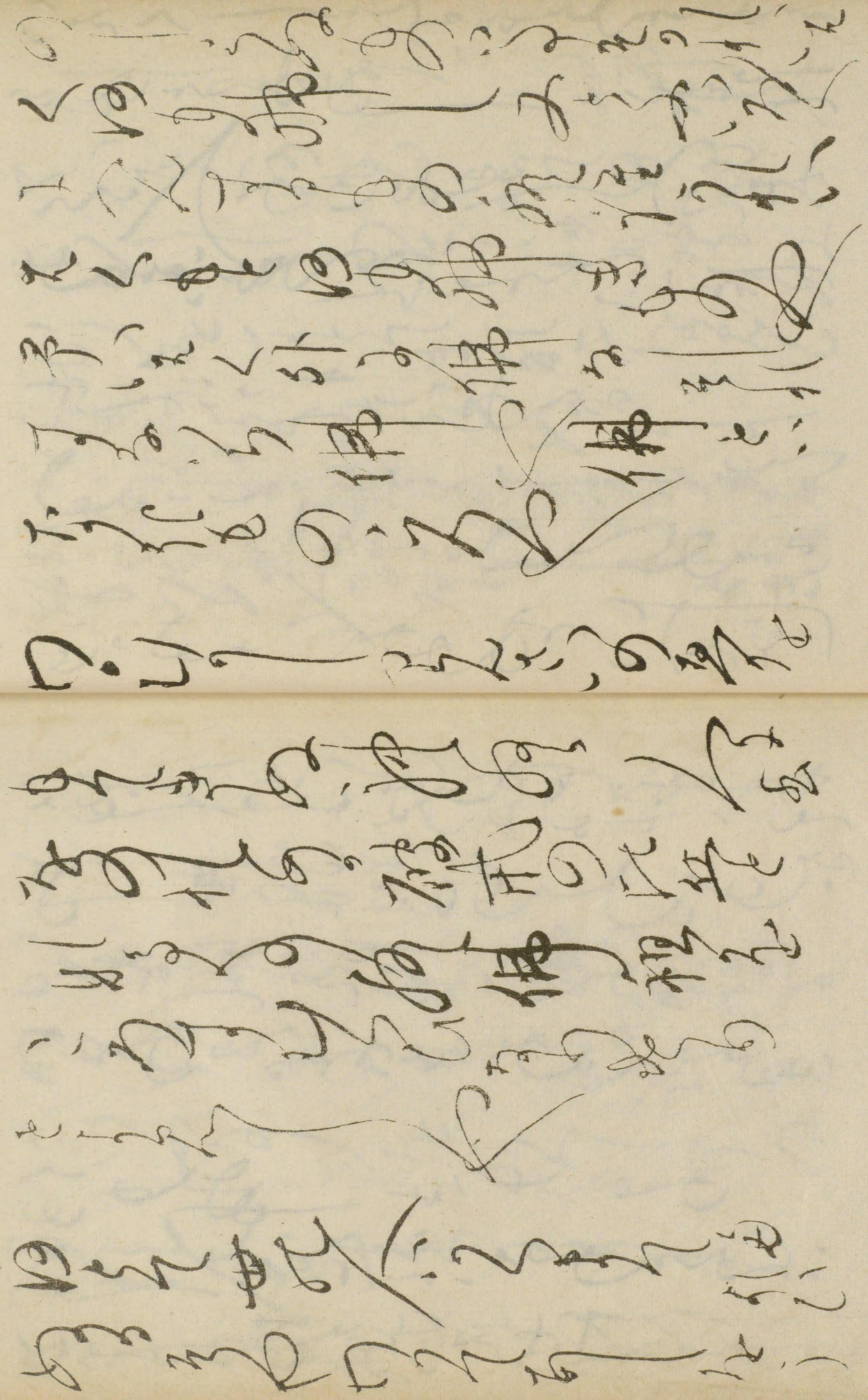
女のきてちるを
さぞんぜのそうぶ
れすまるる
ちるはきそうれの
ゆくようまれ
さそうと言物をつ
ものしりをいとくく

ものしりをいとう
つるぶ、さそうをず
さそうをいとう
くう
屋をいのる人をて
いくいかれ
していのるまを

しらすある人へ佛のみ
といへまゐりてとむらひいのり
わるけんへていえくしらすい
いのちのきさんの
ある人へ後世をいのりやすみね
みひてとみなよのさんとひ
しにたまひて佛と
なんしまへとゆへされ

みある人生れのきさなれと
らすれてのちのし
まし れとし 人を
わをとつていえくつまの心え
いつとしにいろくよの
うむりあまとりの神
ぬといへの事いえくもみは
神いいえあうくわりなりと

しりさんとうの事
ていえくゆもおもいてはるよ
とりしりをたてはりまもの
しりをすてまれこんをこ
らきつくつらるる
いしいしいとのちは
ゆるるみ
ゆのわすりあるとい
とこうしさてはりものもち
るいうしたいしたい
きしいすしうるつく
あるまこ
ゆうあり
ひのとつのはい
いえくしうよ



こゝゆをいとせつなく
のこりなくたゞいとうとく
ほゆるかなきまゝのうち
いとうたてときあるかなき
ものをしれるこゝろあり
ゆゑをしれるのうちを
ものうきなかめれ

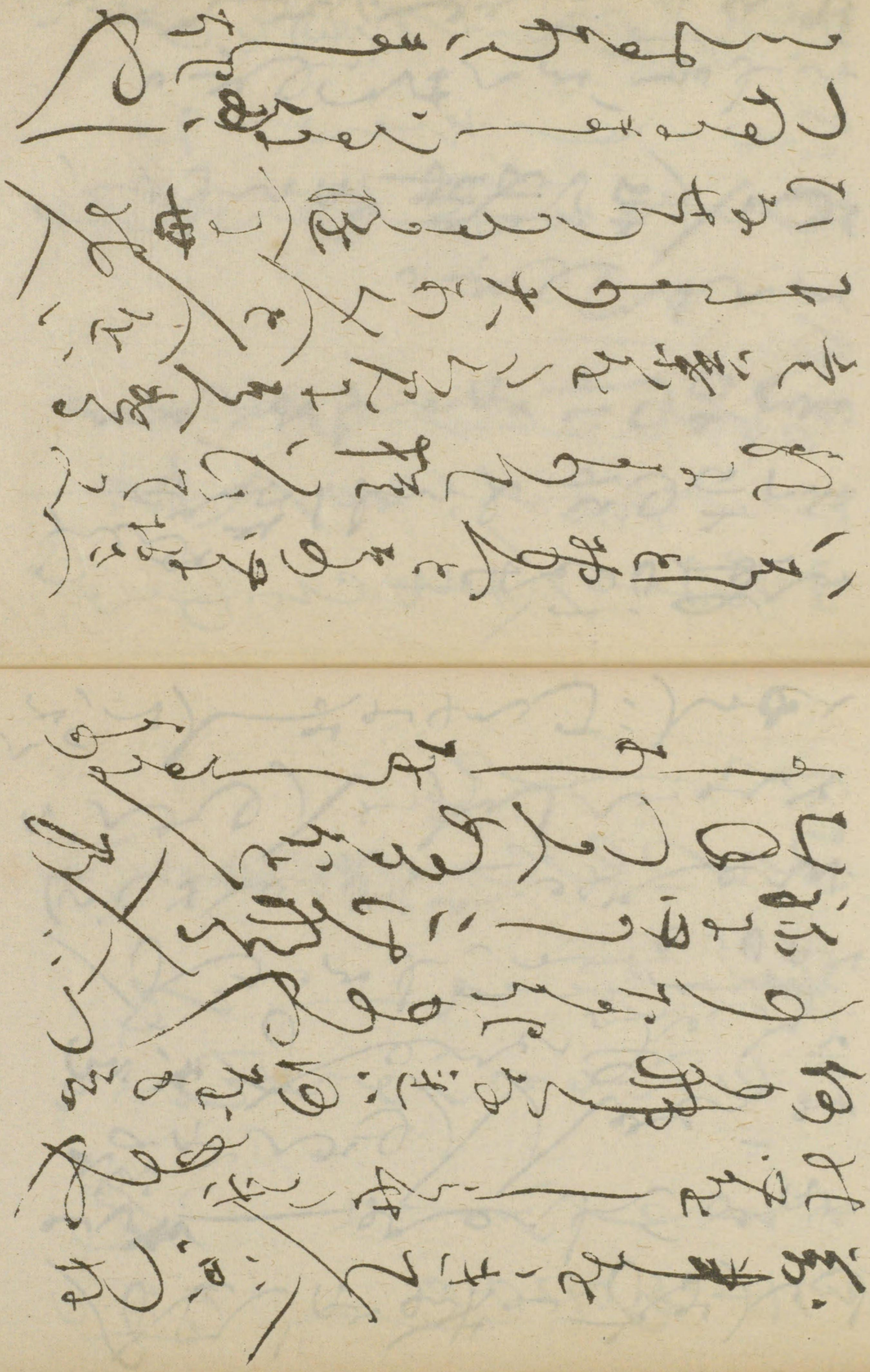
まゝはいとうとく
しりたるうち
いときすゝましき女の
ねてほとゝぎすのこゑ
といふうたをしりぬ
つゆ露なくまゝ
ひとりをとこ

いまくわしくあめのぬ
志んきやまよまつ乃えんやと
いひしハ方を引くて
万のよ庵ゆへとこの
いまよくしりぬ
悟りする／＼一方乃

業をはなるゝといふのいまよく
しりぬ
悟りさハ方をはなるゝと
云ふのいまよくしりぬ
天下西風をささる／＼に
佛道にゝよくこの
いまよくしりぬ

王下四郎の
と云りいまとしなり
時のいるといるとも
事いまとしなり
ひらいのりと云ます
くしりの

多人ひつまよみていえく
多くよつ人のをを
云りなる仏ぬすかを
をはなといかえ
ろのすへ大を
よいるまへのをを
をもるるを
つくみれよ芳をつ



ある法師の門弟
となる者いとくせしの外の
ある人他山修行をとふ者い
てらせしの外
是他の外をとふ者いとく
是他の外をとふ者一行をあ
うれ法師

山あるまへ未ゆるり
すまをすまなるく世界
をとくしてこうれ法
師

ある法師ゆるりす
ひまいすこうしまし
こかくへのるをなりわ
ろい

八女ハ一ツ
なれども
男女のまじはりを
しりていとく佛道
男女いまし
ある法師
男女のまじはりさまたと

言語言句をの
りすいくるなれ
ぬるノ異山玄師八月
佛道ありしいま三百
そくこさすとい
米をとし
語いとくあさゆいの生命
してその味

ゆきかへる
人もなし

あるゆくえをたづねて
てもなのあるきを
をれいかをあいなれば
なほてをこのゆくえの

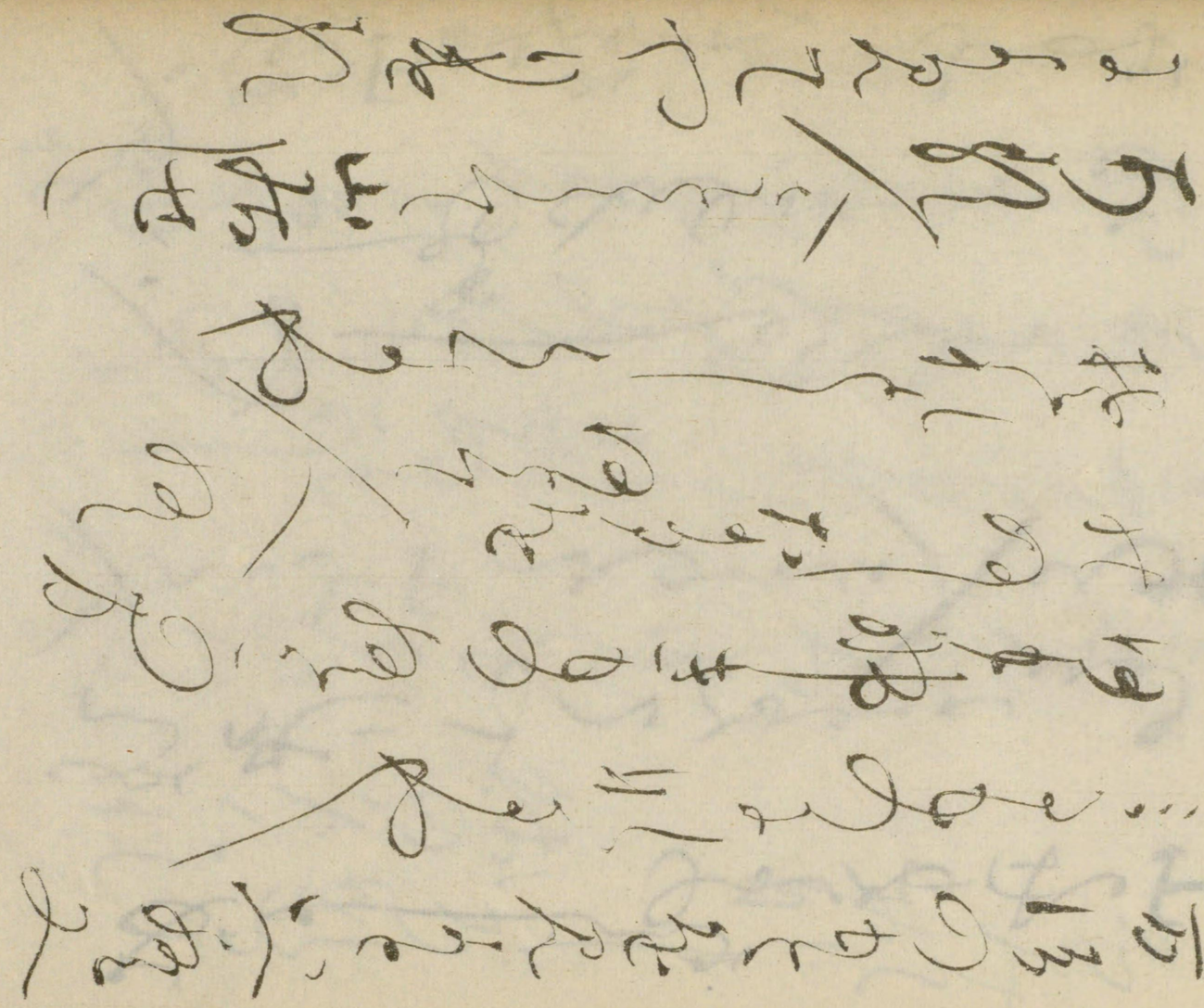
後の世をいかに乃
つゝけとなり
世中乃世をはかなみ
このゆくえをたづね給
ことをなりよこそ

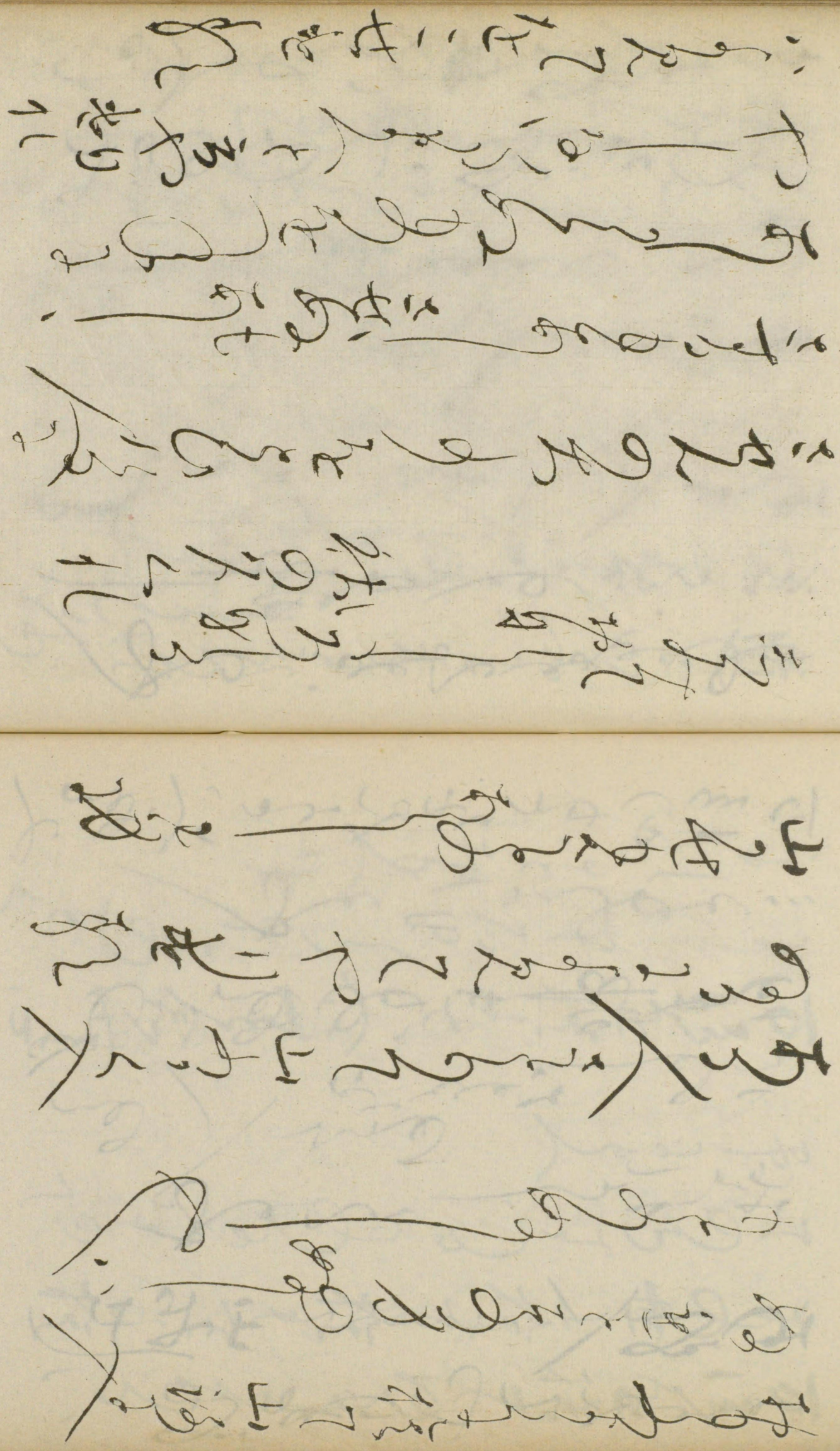
たゞ念仏やうにまかせて
佛をたのみてを

ちてしおとをやいとりて
あとをのくたきいやしき
方すゝりちりれとゝさて
いまを世人ハつる方を
一らぬとゝ化ハ長
とゝりみ子いとくその心
ぬすとゝ一ハものをうを

あるまりしのちよ只独
ヒカ世又等ま度と云
ワ化法師よ善西同不
同ことを口をうて正
とする時一行をあてハ
乃邪云ありといへさる
ある経法師まりハ絶て

昨日せきやうの
あやまりをしたるとい
うをひきてをきて
て万法流転なるをし
ればとてうたてとも
なれ分の業といふべし
るゆゑとしつ戸いそく
るのとみをひをされ
なるしんれる分の業とて
ちうしん戸いそく弱の
ミをされ
万富貴ハ己言ハ業
をちうちうの戸いそくの
ちうちうしをされ



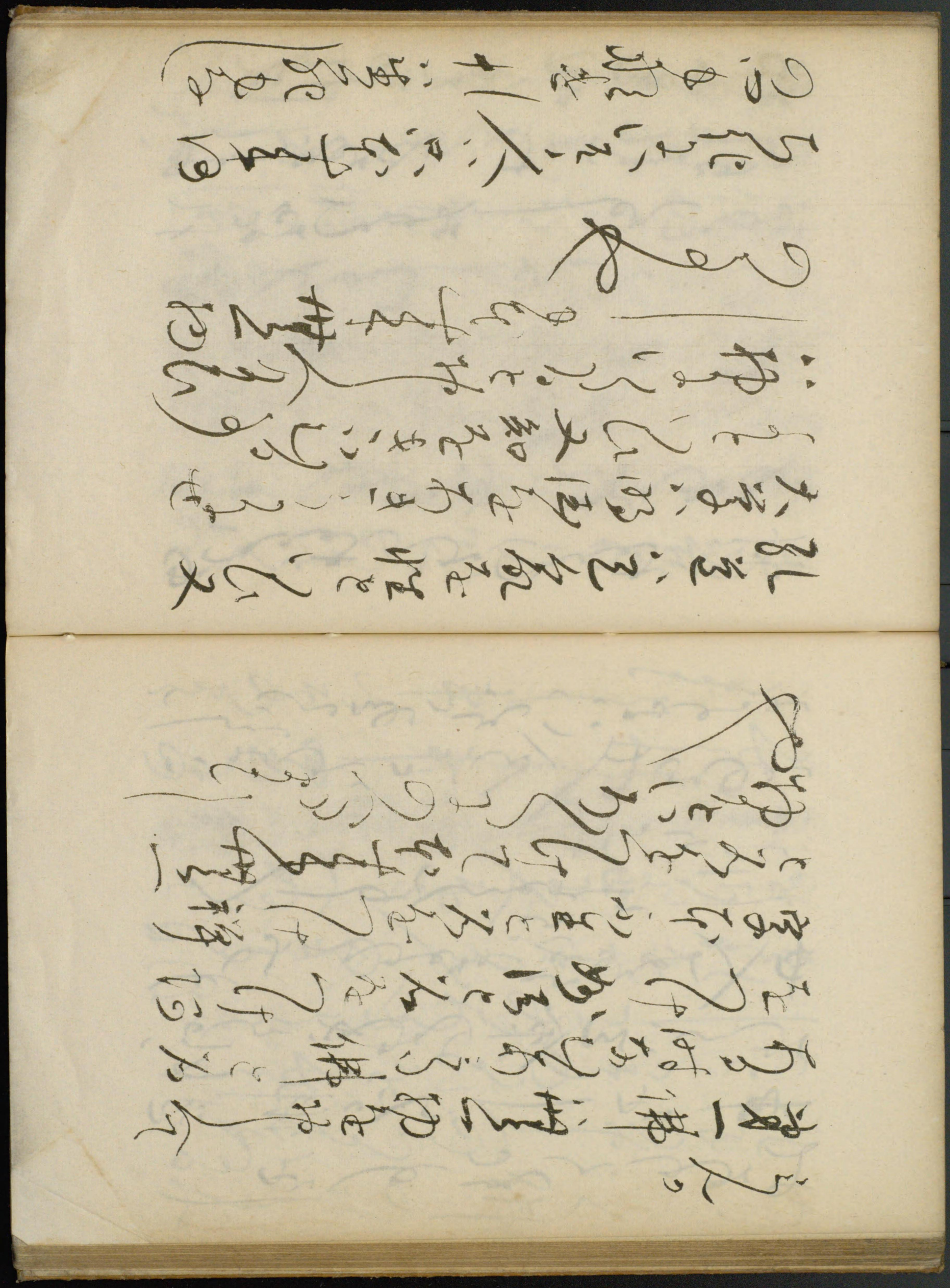


とゝまれあいせの人々も
つねみれはつねの心
つゆいまの神し
君いさくめ道ゝ
ある人まつまていさくなす
道とちうの神し
りみつゆすまいらぬ

道といふことえこそあていあ
なすいはゆるかのえぬ
さてもく世のみちとめし
ありとし人はすを
ののおふ日月星山は大
地しかりくねかをと
おすしゝ富士しい
しろうゝめゝとうゝひ

めるごとく佛
弘るの弟子のもちいめる
ことよるものいとをもてれ
ものもてことをとり
れをもてことをは
世間の世人をさへめるも
ことりやの法をを
もてれ事
いまだ事のそのまま

よりまいるをみるに
よのもの人乃ことをいるよこ
神かとあるのうらに法の
しりけんもしく
世人するゆるよるすす
あるいは命のあるまきらは
事をしらの佛を
ものあるうれ



邪正是非をたゞしたまはんとて
ひとりの男をしたがへ
給ふ
いつくしきなを
ひとつの男なを
ひとつへて恋をつ
くりつゝて老
ひとりの女あ
ひとりのいあ

ましく苦りかくのごとく
おくるゝ神
恋をこのこゝろ
なして仏を恋ハ仏を
のごとくしてくるゝ衆
ハ衆のごとくして仏を
ゝるをの生
くるを見て
ゝ帰
さとるべからハ

いまをあらそふ人乃
ありはてぬ世をなげくらん
ほのかなるやうの
ものを世のことはいとを
しらぬとそ人乃
此一書ハ宗門
うくあるよそをあらハす
いとくハ仏ハ
ものなり人ハ
ミなりたれ
る人ハ
こゝをとく
世我の我を
ものとし

いとくハ仏ハ
ものなり人ハ
ミなりたれ
る人ハ
こゝをとく
世我の我を

していやすくしらけり
やの〳〵きしをあへる
まへあるわし
やみはいま一尺住をさせて
させんしてつとめさせよ
つとめはきていかしいてあし

のはしけるのうゑるかい
ねし

寛文六丙午林世月日

至道菴主

字仙によみとらす

ある法師來りて問、如何是即心即佛、一棒あたへていはく、如何是即心即佛、かれ禮拜シテ去。

老婆來問、死て後如何、予云不死、又問、如何是生處、予云一物もなし、婆無答、一棒をあたへぬれば禮拜して去。

老僧來云、本有圓成佛、如何シテ今汝となる、答不識、和尚かへつて會すや、一棒をあたへんとす、予棒をとる、老僧去、予又去。

ある人問、まよへば悟とはいかやうなる事ぞ、予云まよはず、さとらず。

女とふ、ちごく、いかやうなる所ぞ、予云くるしむ所、ごくらくをとふ、予云よろこぶ所、かれ佛をとふ、予云ありがたきもの也、それよりありがたき心いできて、さてその有がたきはいかやうなるものぞととへば、しらずとこたふ、予いはく、そのしらざる所をつねにつとめよ、かれつゐに道にいたる。

人をすゝめんとおもはゞじひを第一とすべし、むかふものいかほどおろかなりとも不便をくはへておしへよ。

ある老尼來りてとふ、よはひ七十におよびて、いまにや佛のむかへたまはんとおもへども、いまだ命ながらへぬるといへるに、おしへていはく、佛といふはほかにあらず、そのほうつねにとなふるねんぶつ也、南無阿彌陀佛ととなへぬれば、何の心もなきを佛と申也、かならずをこたらずしてねんぶつとなへて有がたくて何心もなきやうにしすれば、すなはち佛なりとおしへける、つゐに往生とげにける也。

あるわらはべの心さかしきもの佛をとひけるまま、すなはちざぜんさすれば、何の心もなし、それをつねにまもりてよしとおしへて、さてほどへていろ〳〵になりぬる心をとひければ、かれ心得て去。

男女にかぎらず、まづ見性させてざぜんさすべし、見性十分にいたりぬる時、萬事に應ずる事をおしへよ。

さとりぬるとひとしく、それをまもらせよ、あくねんいづる事なし、年久やしないぬれば道人となる也。

さとりぬるとひとしく萬物是也とおしへぬれば、大かた惡人になるもの也、さとりばかりをまもる人、大かたざぜんにとりつきて、りつしうになるもの也、大道はやくおしへてよきとはやくおしへてあしきと、その人による也、よく〳〵心得ておしへよ、あやまる事なかれ。

ある時儒者にとふ、天命はいづれを天とさすぞ、主命はたしかにあるといへばことばなし。

又ある時問、致智格物とは、いかやうなる事ぞと〻へども、返答なし。

又ある儒のいはく、佛道のおしへは人のたねをたつといへり、予いはく、孔子曾子子思のおしへ、釋氏と同、いかなれば儒には人のたねをくるしむぞ、釋迦尊佛のおしへ、あしくうけて人に云事あやまりの人のあやまり也、世尊六年仙人につかへて身の業つくしたまひし也、六年坐して心をみがき玉ひし也、かるがゆへに釋迦尊佛には、身なし心なし生なし死なし、是非をのがれて是非にまじはり、有無をはなれて有無にまじはり玉ひし也、法をとき玉ひしを名につけて、あるひは法華淨土眞言禪といひし也、禪は釋迦の大道心の名也、本來無一物をのべをかせられし事也。

孔子學而とのたまひしは本心を見つけたまひし事也、時にとは行住坐臥の事也
習とは修行の事也、悅とは本心にかなふ事也、曾子明々德とは心を明事也、格物
とは何もなき物になる事也、子思天命とは魚は水にすむごとく人は天にすむ也、
身のなかに天あるを性と云也、性しだいにするを道と云也、かくのごとくのおし
へなれば、さいしけんぞくのせんさく更になし、しやか如來と、もとはひとつ也。

我宗のこんげん本來をきはめてわが身をただしくする事也。

ある時だるまをもてきて物をかけといひしに、

いかにして是程うそをつきぬらん
さりとてはなきさとりなりしを。

又

をのれめにあたらまよひをさまされて
世に住かひもなき身とぞなる。

又

うつしゑのをこたらでとく法聲を
聞人あらばだるましう也。

ある人りんざいのゑをもてきぬるに、

をのれめがはかひのびくとなることは
佛祖をころすむくひなりけり。

だるまに、

是をだに見る人ごとのまよひかな
かゝずばもとのだるまなるべし。

かしらかぶろのときよりあたりちかく物してなれし心に、いとかはゆくおもひしを、かれあまへて、のち法師になりても、その心えなんうしなはでありしを見てかくのごとくにてはめうがにつきなん事をあはれにおもひしりぞく、わが心にあらねども、のちのかれがむくひをおもひ返してけり、かれもいとくるしげにてさる。

かりそめのわかれだにうき身なりけり
まよひのうちは人の世中。

ある人、法師ならんとゝひしにつまびらかにかたりてけり、第一身をすつる事をもととす、をのが心におもひきらせむため也、肉をくらはざるは血氣をしづめんため也、魚鳥もとよりわが友也、魚鳥にわがおや兄弟なりしもしらざれば也、

此三を以て法師はいむ也。

いかにしてこれほど佛法すたりぬらん、つくづくとおもふにほかにあらず、みな身のうちよりやまひとなりて、終その身をほろぼす事たしか也、外のとがにあらず、釋氏のとが也、みな道にちがひぬる故也、ことはりかな、本師しやか如來天竺國のあるじとして國を捨、さいしを捨玉ひし也、今は世に捨られてせんかたなく、かしらおろして人にへつらひ世をはたる、すがたをかへ、わざをかへぬるばかり也、心にもとむる所は、むかしよりあさましき事也。

ある時むかしの人のいひしことゝて、まよへばさとるといへる人あり、又ある人のいひしは、さとりはなきと云人有。

わがあたりにちいさき子のいひしは、きのふさきし菊の花、けさは蝶に成たると云、ある人のいひしは蝶のとまりぬるならんといへり。

むかし天下の道人といはれし人、てくるぼうをまはすを見て、なき玉ひし也、又同時同やうにいはれし人、ねぶりておはするあり。

ある時いとねぶたかりしにひぢをまくらとして、しばしまどろめるに、夢のうちに月日の光り家にみてり、めをひらきぬればなし。

屏風のうへにさるのゐてなきしに、夢さましてけり、夢いとおもしろかりしをさましぬることよと、ひとりごとしてゐる。

やぶりぶすまのうちよりかしらしろきおきな出て、うなづく、何事かはととひしに、ざぜんすといへり。

むかしわがざぜんしてけるに、いときよらなる女のきて、あたりにゐしかば、ざぜん夢のごとくに破ぬる事有。

ある時きよらなる兒の物かたり玉ひしは、さとりと云物はなきとつげ玉ひしを、いとたうとくおもひける、又ある法師わが家はさとりをもととすとかたりし、いとたうとかりけり。

後世をいのる人にわれとふていはく、いかやうなる心をもとゝして、いのりたまふとゝへば、しらず、ある人、佛に成といへるによりてとなんいへり、われおしへていはく、しらずば、いのらぬがまさんか。

ある人、後世をいかやうにねがひつとめなばよからんとゝひしに、なむあみだ

佛とねんじ玉へとおしへける。

又ある人、生れぬさきをしらず、死てのちもしれまじきといひし人有、われとふていはく、つねの心はいかんと〻ひしに、いろ〳〵にのぞむ事あれどもかなはぬといへり、予いはく、もしかなひなば、いかばかりうれしかりなんと〻ひしに、さなんといふ、予おしへていはく、何もおもはでゐたまへといひしにつけて、何もおもはぬ行をすとて、まなこをみひらきつよくつとめぬるよしいひしが、まことにのちにはおもはぬ人になりしとき、何かねがひありやといへば、なしとこたふ、さてはねがひのみちぬるはいとめでたしといひければ、かれうなづく。

ある眞實なるとひごとしける人あり、予おしへていはく、そのとふぬしはたぞ、かれいはく、しらず、予又とふ、そのしらぬものはたぞ、かれいはく、何もなし、又とふ、いろ〳〵にへんずるものは誰、かれいはく、もと何もなきもの也、予いはく、外に佛なし、それすなはち佛也、佛とはなきもの〻名也。

わがむかしりんざいのゐをもてきぬれば、うへに書、

をのれめが破戒の比丘となる事は

佛祖をころすむくひなりけり。

とよみし也。

何とて世の人はかくまでまよひぬるぞや、わがてあしをうごかし、物をいはせわが身のぬしを見れば、さりとては何もなきものなり。

いとわかきとき、あるかたちきよげなるちごのあたりに物しける時、心のうつる事をたしかにおぼへぬれば、まよひといふ事をよくしり侍りぬ。

いときよらなる女のあたりにゐて何ともおもはねばさとりといふ事をよくしりぬ。

ある人、本來にまよひもさとりもなきといひしをいまよくおもひあたりぬ。

しんぎやうに、まかはんにやといひしは、身をなくして、萬事に應ずると云事いまよくしりぬ。

修行する人は第一身の業をさると云事、いまよくしりぬ。

修行者は身をいたむると云事、いまよくしりぬ。

天下國家をゝさむる人に佛道おしへよと云事、いまよくしりぬ。
天下國家のぬしはぬしなりと云事、いまよくしりぬ。
時のいたるといたらざると云事、いまよくしりぬ。
むくひのあると云事、いまよくしりぬ。
たとへばわが子におしへていはく、君によくつかへよ、人のあくを云事なかれ、萬事の道を心得よといふばかり也、おろかなる事也、大道にいたる人、人のあくをも善をもいふ事なし、君につかへ、おやに孝をつむ也、萬事をゝきて人は只つねの心をしらせたきもの也、何もなくなれば何をも云事なきもの也、つねに心かしこげなる人は、むねつかへぬるほど人のよしあしをしるによりいはじとおもへど、その心におさへるによりて、猶いひて又言葉をたくみにそへけるにより、大あく人と人をいひなせり、かるがゆへに世の人つゐにまじはるにただしからず、あさましき也。

ある法師、即心即佛をとふ、予いはく、ぜひのほか。ある人、非心非佛をとふ、予いはく、ぜひのほか。是非の外をとふ、予いはく、是非の外。又とふ、一棒をあたふ、かれ心得ず。

山居する人來りて物がたりするを聞ば、なか〳〵世中を見くだして高き事及がたし、ある寺法師、物がたりす、ひきゝ事云にたらず、とかく人のならぬ道なり、あるひはたかし、あるひはひきし、本來無一物をしらず。

ある人、男女のまじはりをいむ、予いはく佛道にあらず、男女はまじはる物也。

ある法師來りて、大道人男女のまじはりにさはらずと云、予云をのがみちにあらざる事いふ事なかれ。

妙心寺ノ關山國師は一則にて悟道ありしに、いま三百そくこさするとはいかやうなる事ぞとゝひし人に、予いはく、あさゆふいゐを食して、その味しる人まれ也、もししる人あらば、くらはざる人なり。

あるゆふぐれにいとさびしくてありしに、かねのひゞきければ、ふとあはれにおもひて、

なれて聞このゆふぐれの鐘の聲も
おもへばいつのわかれとかせん。

世中の無常をおもへば、このゆふぐれもおしむべきもことわりにこそ。

たかき人、いやしき人あつまりて佛をとひしにてをうちて此おとを聞ばひとつ也、などをの〳〵たかきいやしき身にかはりあるとゝへば、さては身をおもへばわかる、身をしらぬときはへだてなしといへり、又予いはく、そのへだてぬ所をしるものはたぞ、あつまりし人のうちに、只獨、今日も又暮に及と云。

わかき法師に善惡同か、不同かとゝひしに、口をうごかんとする時、一棒をあたへて、何の邪正かあるといへば、さとる。

ある經法師さとりは絶てなし、せめてきやうよみて、たすからんとてひろげぬるをひきとりて、其經を以て萬法絶てなき所をしれとて、うてどもしらず。

ある人、身の業とはいかやうなる物ぞとゝひしに、予いはく、そのとふまよひをされ。

あるひんなる人、身の業とてくるしむ、予いはく、そのくるしみをされ。

ある富貴なる人、過去の業をよろこぶ、予いはく、そのよろこびをされ。

萬法を捨て何事かある、いまの世に捨て、捨はてよ、捨てのちすつるものなくなりて、予にとへ。

萬法を捨よといへば、無念無心にして、石かはらなどのごとくになるとおもへり。

萬法のもとを見よといへば、又みるものになる也。

何もなきものはこの身のぬしなるを
何とて人はそれとしらずや。

ある人さとらで山居せしによみてやりける。

おもふまゝに捨て山路に入ぬれど
その身のぬしはもとのぬし也。

ある人さとりて山ふかく入ぬるによみてやりける。

山かぜもさとのあらしも身にしみて
おなじいろなる秋の夕ぐれ。

ざぜんの大事をとひける人に、さするもあしゝ、させぬもあしゝ、あしからぬものをつねにやしないたまへと云やりければ、よみてをこせける。

とゞまるも行もかへるもつねなれば
つねの心のつねだにもなし。

予いはく、如是々々。

ある人につげていはく本來道と云事もなし、ものにまかするばかり也。

道といふことばにそめてまよひけり
本來は只何もなき也。

さても〳〵世のおとろへし事といひし人に何をかのたまふ日月星山河大地むかしにかはらぬ物をとおもひしが、雪もむかしはしろからぬかとうたがひぬるごとく、佛のおしへ孔子のおしへのちがひぬるごとき、そのいひをかせられしことのあきらかさよ、それをことはる人のきたなげさよ、世に人をさゝへぬるもことはり也、諸經にのべをかせられし事、四書にのたまひし事のそのまゝによまば、いかほど有がたからんにのちの人のことはりにこれほどあしからんとは誰かしり侍らん、もし〳〵世人すなをになりて聞事あらば天命のあきらかなる事をしらんか、佛道のありがたき事をしらんか。

第一佛は無一物をおしへて、ある時なむあみだ佛と名をつけ、妙法と名をつけ阿字本不生と名をつけ、禪と名をつけて、本來無一物をいろ〳〵にのべたまひし也。

孔道は天命を性といひ、又大學は明德をあきらかにせよといひ、又知をきはむる事は物にいたるとおしへ玉ひしも本來無一物の事也。

ちきにいはば人は只本來何の心もなければ生死もなし、邪正是非をはなれて、しかもはなれず、わが身なければおもひなし、おもひなければわざはひなし、わが身なければ君につかへて忠をつくし、おやにつかへて孝、身あれば念あり、念あればねがひあり、ねがひあれば苦あり、かくのごとくあきらかにしれし道をゝのがさま〴〵いひなして、佛道は佛道のうちにてあらそひ、儒は儒のうちにて佛をしかり、をのれ〳〵をたてしかなしさよ、又かくいへば是をあらそふといふ人あり、何とも堪がたき人の心のおそろしや、かうやうの事を世のすへといひしを

しらざればことはり也。

此一卷わが弟子あたりちかくありしに書てあたへていはく、かならず後世をねがふ人は、いろ〳〵心にくるしみあり、ぢきに佛をしる人はねがひなし、これをよくしるべし、無我の我を以て人に教れども有我の我を以て聞人はしらず、かうやうの人はじひをあたへる事なかれ。

聞人には第一見性をさせて、ざぜんしてつとめさせよ、つとめにしたがひて、たしかになる事うたがひなし。

寛文六丙午神無月日

孚仙にをくる

至道菴主

202
341

大正四年二月十八日印刷
大正四年二月廿一日發行

無難禪師法語奥附
定價金五拾錢

編纂者兼發行者　東京市神田區鎌倉町三番地　小谷保太郎
印刷者　東京市京橋區築地二丁目五番地　鈴崎芳次郎
印刷所　東京市京橋區築地二丁目五番地　臺紙開舍
發行所　東京市神田區鎌倉町三　振替東京一一八四四番　政教社

不許複製